身近な雑かん木（7）　ゴンズイ

NPO法人自然観察大学　岩瀬　徹

林の縁部や林内に生育するミツバウツギ科の落葉低木あるいは小高木。高さは３～４m。葉は緑が濃くて光沢があり，秋遅くまで（ときには冬まで）残っている姿を見ると，一見常緑樹ではないかと思わせる。

冬には枝先に芽（仮頂芽という）が２個着き，やがてこれが成長するので枝が対生に見える。樹皮は灰褐色から黒褐色で，縦に細かい白いすじ（皮目）がある。葉は対生し，大柄な羽状複葉，小葉は２～５対，縁に細かい鋸歯があり，鋸歯の先端は丸みを帯びる。

花期は５～６月，新しい枝の先に円錐状の花序をつける。花は小形で黄緑色，がく片，花弁，雄しべそれぞれ５個。雌しべは１個で心皮は３個からなり，柱頭は３裂する。心皮はのちに分かれてそれぞれが果実となるので，柄の先に１～３個の果実（袋果という）が着く。果皮は多肉で熟すと赤くなり，やがて合わせ目から裂開して１，２個の黒い種子が現れる。晩秋の林縁にはこのころの色彩が目立つ。

ゴンズイの名について諸説あって，牧野植物図鑑には魚のゴンズイからきたのであろうとしている。ゴンズイは役に立たない魚で，この木も役に立たないからだというが苦しい説明である。植物語源研究家の深津正氏は，平安時代にミカン科のゴシュユという木をコニスイと訓じており，これからゴンズイに転じ，似た木であるゴンズイに当てはめられたであろうと推論している。

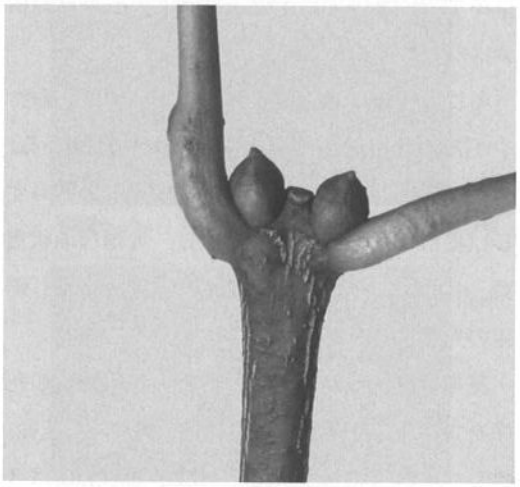
写真－１　葉は羽状複葉で対生(5月)

写真－２　枝の先に円錐状の花序をつける(5月)

写真－3　花序の一部

写真－4　心皮は3裂し，それぞれが果実になる（8月）

写真－5　果皮は裂開し種子が現れる（11月）



写真－6　越冬する芽（2個の仮頂芽）